

関係文法的観点からの受身変形に関する一考察

清 水 緑

I. 関係文法的視点からの受身変形

1. 0 従来の変形生成文法理論では、受身変形は、1) 能動文の直接目的語、すなわち行為の直接の受け手が受身変形(置換)を蒙り、主語と直接目的語の位置を変える変形であるとみなされている。そして、受身には表層構文に基いて起る変形の他に、2) 深層構造を持つ複文から受身構文を導く幾つかの変形が想定されている¹⁾。これに対して、関係文法の観点からは、受身文は受身変形によって導かれるが、それは表層構文(能動文)の主語、直接目的語、間接目的語などが動詞との文法関係を変える変形によって導かれるとしている。従って、深層構造を持つ複文を設定しない点で従来の変形生成理論とは異っていて、受身変形も文法関係を変える一つの変形方式と考えることにより、受身を説明しようとするのである。

ところで Perlmutter & Postal (1974) が始めて提唱した関係文法の受身変形²⁾というのは、能動文の主語が受身変形を受けるために、主語としての役割と動詞との主述関係を失ない、能動文の直接目的語または間接目的語が新たに主語としての役割を得、動詞との主述関係を持つに至るとの考え方である。従って、変形以前の文の主語は、動詞との関係を失った結果、言語により斜格となったり、あるいは存在しなくなったりする。

この小論は形態的に異なる言語について、受身変形を上述のような関係文法の視点から分析することにより新しい考察を試みたものである³⁾。ここで採り上げた言語は、英語、仏語、日本語、モンゴル語、フィン語⁴⁾に限られてはいるが、この考察の主眼はこれらの言語に見られる受身変形特

性が、言語の種類別によってどのように条件づけられるかを吟味してみることにあった。

II. 受身変形

2. 1 ここに採り上げた言語では、受身変形により目的語は文頭の位置へ移される。SVO 語順の英語、フランス語では、能動文の主語は本来の主述関係を失って動作主格をとり、動詞は be+p.p. (動詞の過去分詞), être+p.p. をとる。

英語 1. John hit Mary. (能動文)

(主) (目)

→受身変形=目的語→主語

動詞→be+p.p.

1'. Mary was hit by John. (受身文)

(主) (agent)

仏語 2. La pluie lave la voiture. (能動文)

[冠] 雨(主) 洗う[冠] 車(目)

(雨が車を洗う.)

→受身変形=目的語→主語

2'. La voiture est lavée par la pluie, (受身文)

[冠] 車(主) être p.p. [冠] 雨

(車が雨に洗われる.)

フィン語では受身変形の後、能動文の主語は失われるが、動詞には受身を示す形態素が加わる。

フィン語 3. Poika ampui linnun. (能動文)

少年(主) 射た 鳥(目)

(少年は鳥を射た.)

3'. Lintu ammu-ttiin. (受身文)

鳥(主, 目) 射た一受身

(我々は鳥を射た.)

(彼らは鳥を射た)

例 3' のように, フィン語の受身は意味的に例 4c と対応する場合に限って用いられる. そして英語, フランス語, 日本語, モンゴル語などの言語群では, 本来の主語が文法的関係を変えても論理的行為者として残されているのに対し, フィン語では行為者を非人称に限定しているのである.

4. a. The boy shot the bird. (能動文)

(主) (目)

b. The bird was shot by the boy. (受身文—他の言語群での)

c. They(We) shot the bird. (非人称構文)

SOV 言語の日本語, モンゴル語では, 下の例のように文の主語は受身変形後与格をとり, 動詞には受身を示す形態素がその語幹に加わる.

日本語 5. Inu ga Taroo o kan-da.

(主) (目) かむ—過去

5'. Taroo wa inu ni kam-are-ta.

(主) (与) かむ—受身—過去

モンゴル語 6. Bars ber miya-yi idemü.

虎(主) 肉 食べる

(虎が肉を食べる)

6'. Xayan bars-tur ide-gde-bei

王(主) 虎(与) 食べる—受身—過去

(王が虎に食べられる.)

2. 2 受身変形による文法的变化

以上の例から, 受身変形によってもたらされる文法的な変化は次のようであるといえる. 1) 能動文の主語は i) 英語, 仏語では動作主格 (agent

marker) をとり, ii) フィン語では失われ, iii) 日本語, モンゴル語では与格をとる. 2) 動詞は i) 英語, 仏語では助動詞 *be+p.p.*, *être+p.p.* とそれぞれ変る. ii) フィン語, 日本語, モンゴル語では動詞の後に受身を示す形態素がその語幹につく.

言語の類型別によって, 変形後の主語の役割や機能および動詞の形態については, 上述のような特徴付けが出来るが, なお, ある言語や言語群に固有の特殊な型の受身は改めて次に論じる.

III. 特殊な受身構文

3. 1 日本語, モンゴル語の可能, 自発文と受身構文

変形後に主語の機能変化をもたらす場合, 前述のようにフィン語では受身文の主語は非人称として用いられ, 他の言語群の如く能動文の意味と受身文の意味が対応せず, 能動文の主語が受身では論理的主語の役割を失っている. 他方ではまた, 日本語, モンゴル語には, 受身文と文法構造を全く同じくしながら意味的には可能, 自発を表わす文がある. 例7は日本語の自発を表わす文である.

7. (*watashi ni*) *ano-hino de kigoto ga ariari to*

(主)

omoidas-are-ru.

思いだす—受身—非過去

従来の理論では, このような構文は特に採り上げられていないが, 変形後に表層レベルで意味変化をおこすか, あるいは受身文とは異質の構文, 形態素をもつとして説明しなければならないであろう. しかし, 関係文法の観点に立つと, 能動文の主語が変形後に持つであろう機能と動詞の変化が受身文の意味機能を決定する. 従って, この種の特殊型受身文は, 表層構文の主語が受身変形により文法関係を変えるために, しかも通常の受身文とは異なった文法関係を持つことになるので, 論理的主語としての役割

を変え、意味変化をもたらしたとみなされよう。例8は、モンゴル語の可能文である。

8. nadad caas ol-do-x-gui bayna.

私—(与) 紙(目, 主) 見つける—受身—不定—否定である
(私には紙がみつけれない。)

3. 2 文法的に特殊な受身構文の場合

日本語、英語、モンゴル語には、受身構文として2. 1に示した例文とは文法的に異なった受身構文がある。英語についていえば例9の受身文は‘have’, ‘get’を助動詞とする例の一つであり、文法構造も例1とは異なっている。

9. He had a diamond ring stolen by a thief.

(主) (目) (agent)

例9では、‘thief’の行為の直接の対象は目的語‘diamond ring’であり、その行為の結果を間接的に蒙るのが主語‘he’であるという点で文構造ばかりでなく、意味的にも例1と同じではない。

同様な文構造を持つ日本語の例10のような受身文は‘迷惑の受身’と呼ばれ、意味上の違いにより例4と区別されている。

10. Jiroo wa inu ni ashi o kam-are-ta.

(主) (与) (対) かむ—受身—過去

例9の目的語‘a diamond ring’も、例10の目的語‘ashi’も文法的には独立した term ではあるが、意味的には主語と関連を持つ。より具体的に言えば、例9では‘a thief stole a diamond ring’の行為の対象は‘he’であり、例10では‘inu ga ashi o kamu’での足の所有者であり且つ犬の行為の対象であるのは主語‘Jiroo’である。従って、主語と目的語の間の意味的含蓄は所有関係に基づく、すなわち、文法的には所有格として表わされる、と解釈できよう⁶。それ故、例10は例10'の如き表層文からの受身変形による受身文として導くことが可能である。

10'. inu wa Jiroo no ashi o kan-da.

(主) (所) (対) かむ一過去

なお、例10の意味的特性‘迷惑の受身’についても、文法関係が所有格が主語となることにより変化したとして理解出来るであろう⁷。

この種の文構造を持つ受身はモンゴル語でも見られ、主語が行為の直接の対象となる受身文とは区別される(例11と例12の比較)。

11. Tatar irgene bari-γda-a-bi.

タタル人(与) とらえる一受身一過去一私(主)

(タタル人にとらえられた。一私は)

12. Jesügei Báatur-a Höélün ekeji bulizab-ta-la.

エスゲイバートル(与) ホエルンエゲジ(対) うばう受身一過去

(エスゲイバートルにホエルンエゲジを奪われた一我々は)

例11は話者(主語)自身がとらえられたという直接的な受身であり、例12は、話者(主語)がホエルンエゲジを奪われて間接的に迷惑を蒙ったという受身である。

3. 3 所有格→主語の分析の問題点

ところで、受身文におけるこのような主語と目的語の意味上の所有関係は、文構造上明示されていないが、文法上所有格とみなしてどこまでとらえられるであろうか。まず所有のあり方には、身体の一部のように譲渡が不可能な所有があり、この場合は例10のように文法的にも所有格として表わされる。

しかし、所有物が誰のものか明示されていない例9の主語‘he’は、‘diamond ring’の所有者であるかもしれないし、ただ預っていたのかもしれない。ただ主語がぬすまれるという行為の影響下にあるだけである。このような場合の受身における主語と目的語の意味的関連は、変形前のどのような文法的な形式としてとらえられるかが問題となる。そこで、まず所有格‘の’の意味範囲を調べて、 N_1 と N_2 を‘の’で連結させるとき、

どのような意味関係までを文法上の所有格‘の’で表わしうるかを検討することが考えられる。ここでは、そのようにすれば受身文の構成要素である主語と目的語の間の意味的關係を、表層構文に基いて文法的に明らかにすることが出来るであろうというに止める。

3. 4 自動詞をとる受身文

一般には受身変形は他動詞文を自動詞文へと変え、英語、フランス語では他動詞のみが受身変形を受ける。日本語、モンゴル語では自動詞文も動詞が受身の形態素をとり受身文となる。特に日本語では、既に述べた‘迷惑の受身’と同じ意味的含蓄を持つ自動詞の受身がある。このような自動詞の受身は、自動詞文が、受身語尾を伴なうことにより、意味的にも文法的にも、例13のように異なった自動詞文となる。

13. Taroo wa shiyoo-nin ni niger-are-ta.

(主) (与) 逃げる—受身—過去

例13では、自動詞‘逃げる’の直接の行為は‘使用人’であるが、主語‘Taroo’は使用人の逃げるという行為の結果‘迷惑である’という意味的含蓄を持つ。既に日本語の迷惑の受身について述べたように、‘太郎’と‘使用人’の關係は文法上明示されていないが、意味的には使用人は‘太郎の使用人’であるという指示が伴っている。従って、例13のような受身文は、自動詞の受身文ではあるが、他動詞の受身文と同じとみなすことは可能であり、主語と目的語を文法的な所有関係とみることができる。

13'. Taroo no shiyoo-nin ga-nige-ta.

(所有格) (主) 逃げる—過去

例13'が受身変形を受けると、他動詞文では表層構文の目的語が主語になり、自動詞文では、主語が主語となる。非所有 N は前者では目的語として止まるが、後者では与格をとるという違いがある。モンゴル語においても、次の例が示すように自動詞文が受身文となる。

14. ɣurban Merkid-te ire-kde-zu. ...

3のメルギッド—(与) 来る—受身—連用形

(3のメルギッドに來られ—(我々は)...)

15. Qan-a ele nilbu-yda-zu...

汗(与)(強) 唾をはく—受身—連用形

(汗に唾をはかれて—(我々は)...)

フィン語の例では、次のようなものがある。

16. kotiin tul-tuessa löi kello kusi.

家に 帰る—受身 時計 打つ 6時

(家へ帰ると、時計が6時を打った。)

これも‘家へ帰る’人である主語が明示されていない場合である。

受動文となる自動詞の範囲については、日本語では比較的範囲が広く、‘死ぬ’、‘降る’、‘ふく’、‘泣く’、‘行く’、‘帰る’、‘逃げる’、‘来る’⁸のような自動詞があるが、モンゴル語では限られた少数の自動詞のみが受動語尾をつけることができる。

ところで、自動詞文から受身文への上述のような変形は、受身の例外的現象であるとみるか、あるいは受身変形としてとらえられるか、は意見の分れるところであろう。受身になりうる動詞は一見ばらばらだが、それらの共通性、例えば、着点を持つ行為かどうか、また動詞の意味的特性がどうか、などに注目することにより解決できるかもしれない。そうなれば、非生産的(unproductive)受身文として扱われ受身変形によって説明することが可能となる。

3. 5 受身文の主語の意味素性

ある言語、または言語類型に特有の文法的変化または意味的变化をもつ受身構文については既に述べたが、なお受身の主語となりうる語の意味特性が言語により異なることにも留意しなければならない。これは従来の理論でも論じられている。例えば、英語、仏語では‘—human’、の意味素性を持つ語が主語となることが出来る。

17. The door was closed by Mary.

(主) (agent)

しかし、日本語では受身文の主語となるのは‘+human’の意味素性を持つ語であり、与格は省略されることもある⁹⁾。

18*?. 戸がメアリーによってあけられた。

従って、意味素性もそれぞれの言語に特有のものとするべきであり、文法構造上類型を同じくする言語間、それが異なる言語群間で、どのような関係が見られるかが面白い問題である。

IV. 受身文と使役文

日本語、モンゴル語の使役文は、自動詞や他動詞に使役語尾それぞれ‘-ase’, ‘-sase’, ‘-ge’, ‘-ul’をつけて他動詞文に変形したものである。従来の生成変形理論では、使役文は深層構造からの上昇変形によると説明している。これに対して関係文法では‘Clause Union (節結合)’によって下位節の主語を上昇変形させて主節の主語に変えるのである。例えば例19は例19'から上昇変形によってNの文法関係を変えたとみる。

19. Taroo wa imooto o nak-ase-ta.

(主) (目) 泣く—使役—過去

19'. [Taroo saseru] [imooto ga naku]

(主) (主)

⇓ Clause Union 主語(imooto)→目的語

Taroo wa imooto o nak-ase-ta.

(主) (目) 泣く—使役—過去

しかし、下位節が他動詞文の場合には次のようにその目的語は Clause Union 後も目的語としてとどまり、文法関係は変化しない。

20. Taroo wa Hanako ni kodomo o tatak-ase-ru.

(主) (与) (目) たたく—使役—非過去

20', [Taroo saseru] [Hanako ga kodomo o tataku.]

(主) (主) (目)

⇓ Clause Union 主語 (Hanako)→与格

Taroo wa Hanako ni kodono o tatak-ase-ru.

(主) (与) (対) 動幹—受身—非過去

所有格の受身変形の場合にも、目的格から所有格が主語となるが、非所有格は目的語として残されている。

よって、使役文の変形は受身変形とは異なった要因に基くとしても、日本語、モンゴル語では使役文と受身文とは、文構造や主語の意味素因が互いに似ているといえる。例21は動詞の語尾の変化で受身文となる。

21. Taroo wa Hanako ni kodomo o tatak-are-ta.

(主) (与) (目) $\left\{ \begin{array}{l} \text{受身—過去} \\ \text{ase-ta} \\ \text{使役—過去} \end{array} \right.$

それ故、いわゆる関係文法的な考え方をさらに一步進めて、使役文を受身文と同様な表層構造から受身変形と対等な使役変形を受けたと見ることも可能なように思われる。

ただし、受身文において対応する文が問題となったように、自動詞文を他動詞使役文に変形する際、使役文に対応する表層構文を如何に設定するかが問題であるが、それは今後の検証を待つことにする。

結 論

この小論における考察によって導かれた主な結果を要約すると次のようになる。 1) 日本語、モンゴル語の自発文や可能文は受身変形後に能動文の主語が文法関係を変えたことにより、意味変化がもたらされたと説明できる。 2) 日本語における主語と目的語の関係が文法上明示されていない特殊な文法構造の受身文は、意味的關係では文法的に所有格としてとらえられるとみられる。 3) 一般に自動詞文は動詞の意味的特性の共通点をさぐることににより、表層文を導けるのではない。 4) 日本語、モンゴル

語のような言語類型の使役文は語順、格の役割などが受身文と類似しているという点で、英語や仏語などのそれと異なっている。これらの両言語類型に共通な変形法則が見出されるか、それとも類型別の変形とみるべきかは、さらに検討の必要があろう。

なお、以上の結論は少数の言語の例証に止まり、問題を提起した予備的なものであることをお断りしたい。より広い範囲に及ぶ諸言語についての問題点の追究は後日に期することにする。

注

- 1 日本語における文法的に異なった受身文、使役文を深層構造から導く場合の変形は、Kuno, S. *The Structure of Japanese* (1973. MIT Press) を参照せよ。また Shimizu, M. *Japanese Passivization* (UCLA 修士論文, 1976) では従来の変形文法理論と関係文法理論による日本語の受身変形を比較検討している。
- 2 Postal & Perlmutter “Some General Laws of Grammar” handout (1974 LSA).
- 3 広範囲の言語について関係文法の立場から受身を扱ったものに、Keenan, E. L. “Some Universals of Passives in Relational Grammar” *CLSII* (1975, University of Chicago Press) があり、ここでは従来の変形理論による受身分析との比較検討がなされている。この小論も、関係文法の立場からの受身の考察であるが、ここでは主に能動文と受身文との関連が意味的や文法的に特異と思われる場合を採り上げてみた。
- 4 フィン語に関する資料は、尾崎義『フィンランド語四週間』(昭和20年大学書林)にとどまる。モンゴル語に関する資料は、庄垣内正弘「アルタイ語シンタックスの比較 1. トルコ語・蒙古語・満州語の格機能の比較研究」(京大修士論文 1970), Poppe, N., *Grammar of Written Mongolian* (1964 Wiesbaden) Haugin, J. G. *Basic Course in Mongolian UAS* (Vol. 73, 1938) である。
- 5 時枝誠記『口語日本語文法』(岩波書店1950)他に日本語の助動詞に関する調査、研究には北原美紗子“助動詞(3)”岩波講座：日本語, 7 文法Ⅲ (岩波書店), 竹内美智子“助動詞(2)”岩波講座：日本語 7, 文法Ⅱ (岩波書店1977) があり、参照した。
- 6 日本語でのこの問題は、関係文法との関連において Shimizu, M. “Relational Grammar and Promotion Rules in Japanese” *CLSII* (University of Chicago Press, 1975) で始めてとり上げた。所有格を主語とする変形、特に二重所有の間

題は N. McCawley “Arguments against Keenan-Shimizu’s Treatment of Japanese Passive” *Journal of Japanese Linguistics* (Academic Press, 1975) が論じている。

7 Keenan, E. L. “Remarkable subject in Malagasy” *Subject and Topic* (Academic Press, 1975) は所有格が主語となった場合には、主語が何らかの影響を蒙ることを次の例 1 で指摘している。

1. a. maty ny vadi-nd Rakoto
 死んだ [冠] 妻—所有格 ラコト
 (ラコトの妻は死んだ.)

b. maty vady Rakoto
 死んだ 妻 ラコト
 (ラコトは妻に死なれた.)

8. 次のような天候を表わす受身では、所有格を主語とすることは出来ない。

2. Taroo wa ame ni fur-are-ta.
 (主) (与) ふる—受身—過去

*2' Taroo no ame ga futta.
 (所) (主) ふる—過去

Yamada, M., Yamamoto, A. “The Syntax and Semantics of Japanese Passives” 『島根大学紀要』 Vol. 7 (1975) によるこの問題の扱いは、従来の変形文法理論による分析であるが興味深い。

9 擬人化は例外である。